

【論文】

東と西の17世紀

——佐々木力『近代学問理念の誕生』中国語完訳に寄せて——

李 梁

はじめに

本稿は、一昨年（2020年）末に急逝された科学史家佐々木力教授（1947-2020）（以下、敬称は割愛か氏を使わせていただく）の追憶のために、氏の代表的著書の1つである『近代学問理念の誕生』（岩波書店、1992年、サントリー学芸賞受賞。以下、「本書」とする）の中国語訳を完了して草したものである。氏の専門分野は、数学史を中心とする17世紀ヨーロッパの科学思想史である。後で詳述するが、本書で扱った思想家達も、主として西欧17世紀の歴史的人物であるため、東洋思想学徒の筆者にとってみれば、ごく自然に、同時代の東洋ではどのような思想世界を呈していたのかを概観してみたくなる訳である。これが、本稿題目がつけられた所以である。

今にして思えば、前回のミレニアムという大いに騒めいた年の盛夏八月に、国際歴史科学大会（第19回）会場となったオスロ大学で、氏との出会いは、何かの因縁めいた出来事のようにであった¹。それ以来公私にわたって交誼し、二人の間では、筆者にとって中国語の「亦師亦友」という成語がぴったりの間柄であった。しかし私的交誼ぶり、並びに筆者からみた氏の学問の一般的特徴とその方法論を盛り込んだ長大な中国語記念文は、既に公表済みのため²、ここでは、本書の中国語完訳を通して、本書の執筆背景とその動機、および訳者の所見を若干述べておきたいと考える。

まず先に、東西の定義について注記しておこう。ここでいう東西とは、単なる地理的空間の概念というより、むしろひとつの社会的、経済的ないし政治的構造体を指す意味合いの方が強いと言いきかかも知れない。そうした意味の東と西は、それぞれ前者は、狭い意味の東アジア、つまり、いわゆる「漢字文明圏」所属の日、中、朝（韓）を、そして後者は、専ら17世紀以降のネーデルラント南部からイングランドの北部を含む「西ヨーロッパ」という地域空間とその社会構造体を意味している。

¹ その詳しい経緯については、下記の記念文に記してある。本稿では、割愛する。

² 「従奥羽山麓走出了“学狂”——紀念佐々木力先生（1947-2020）」、中国科学院自然科学史研究所『科学文化評論』（第18巻第5期、2021年12月、5～29頁）を参照されたい。なお、本書の主題を統べる網領的な序章「科学革命論——十七世紀学問理念の形成と受容」の訳文も同誌同号に掲載されている（30～49頁）。

さて、16世紀の「文化革命³」をへて、「世界の機械化」に象徴された「17世紀の科学革命⁴」は、周知のように、近代世界または近代科学の起始の世紀として、人類文明史において極めて枢要的な意義があることは改めて贅言する必要はなからう。ところが、かつてホワイトヘッドから「天才の世紀⁵」と称賛されたかの輝かしい17世紀は、実は暗黒事件によって幕が切って落とされたのである。すなわち、1600年の2月17日、ジョルダノ・ブルーノ（Giordano Bruno、1548-1600）がローマのカンポ・デ・フィオーリ広場に引き出され、火炙りの刑に処せられたのは、それであるにほかならない。ブルーノは「殉教者であった」が、「もっとも彼が苦難を嘗めたのは科学を擁護したためではなく、自由な想像的思弁を盛んに行ったためである⁶」。それはさておき、佐々木によれば、ホワイトヘッドの「天才の世紀」という規定は、「無前提的に」なされたという。なぜ「無前提的に」というと、それは「十七世紀の「天才たち」がその中で苦悶し闘った状況についての言及はほとんどなく、彼は十七世紀の科学上の業績を記述することに終始している。他方の東洋的近代の人々は、十七世紀ヨーロッパに何が生じ、どのような社会的・思想的・前提の中から近代科学が成立したのかを探究することなく謎のまま衝撃を衝撃としてうけとめた⁷」からである。そうして、東の17世紀に目を転じてみれば、奇しくも、ブルーノの火炙りの刑の約2年後、つまり明朝万暦30年、西暦1602年5月7日、東洋史家の内藤湖南から「古今未曾有の過激思想家⁸」と称された李摯（号は卓吾⁹、1527-1602）の獄中自害を目印に、「朱子に始まり陽明学最高潮に達した哲学時代は終わり、精彩のある思想運動としては、東林学派に席を譲らねばならなかったのである¹⁰」。言い換えれば、中国もいよいよ「天崩地解」（黄宗義語）の明末清初期¹¹に突入したのである。

明末清初期は、中国思想史上、兩宋以降の道学（性理学）から、清代の朴学（「实事求是」を重んじる考証学、文献学および訓詁音韻学）への重要な転換期である。明末思想の基調は、依然として王学であったが、しかし王学の分化（王学左派、右派）とともに、経世致用重視の実学主義学風が

³ この言い方は、以下文献に見做っている。山本義隆『十六世紀文化革命』上下、みすず書房、2007年。それから、ホワイトヘッドのいい方に従えば、16世紀は、近代科学の「醜態の時代」だったという。ホワイトヘッド著、上田泰治ほか訳『科学と近代世界』創元社、昭和29年、第一章、1頁。

⁴ 「17世紀科学革命」について、もっともコンパクトで要を得ている概説書は、ジョン・ヘンリー著、東慎一訳『一七世紀科学革命』（岩波書店、2005年）である。ちなみに、本書は、正に訳者の学問上の師である佐々木力による提案のもとで完成されたものである。

⁵ 前掲ホワイトヘッド著書、17世紀を扱う第三章のタイトルは、つまり「天才の世紀」である。

⁶ 前掲ホワイトヘッド著書、1頁。

⁷ 佐々木力『科学革命の歴史構造』上、講談社学術文庫版、1995年、第1章、104頁。

⁸ 内藤湖南「李摯の史論」『支那史学史』、『内藤湖南全集』第11巻、278頁。

⁹ 卓吾は字か号か研究者の間では違う見方があるが、ここで林海権『李摯年譜考略』（福建人民出版社、1992年）に従い、号とする。

¹⁰ 島田虔次「明清の思想界」、『中国の伝統思想』みすず書房、2001年、149頁。

¹¹ 明末清初期の時代区分について、必ずしも厳密に限定されているとは限らないが、本稿では、謝国楨説に従い、明万暦30年から清康熙40（1701）年の約一世紀の時間とする。謝国楨『明末清初の學風』上海書店出版社、2004年。1頁。

漸次台頭するようになった。東林学派による「精彩のある思想運動」の要諦は、或いは王学左派「狂禅化」(その中心的人物は李贽)の修正にあったと言える。それに、同時期にはまた、中国の前近代まで最後のかがやきをみせた仏学、イエズス会経由の西学、復古を唱道する古学なども交錯して現れ、相互刺戟し合い、時代の激変と裏腹に、稀にみる豊饒な思想時代を育んだと見なされている¹²。

やや敷衍すれば、西の天才輩出の17世紀、恰もホワイトヘッドが列举したように、フランシス・ベイコン、ハーヴェイ、ケプラー、ガリレオ、デカルト、パスカル、ホイヘンス、ボイル、ニュートン、ロック、スピノザ、ライプニッツ¹³などの錚々たる人物に対して、東洋的文脈からみれば、明末清初期も天才輩出の時代だった。例えば、「亭林(一顧炎武)、黎洲(一黄宗羲)、船山(一王夫之)、百泉(一孫奇逢)、太原(一傅山、戴廷栻)、二曲(李顛)、顔李(一顔元、李塍師弟)、桐城(方氏一方以智、方中通、方中履父子)、寧都(一魏禧兄弟ら「易堂九子」)、廣陽(劉繼莊)、晚村(一呂留良)、新繁(一費經虞、費密父子)、達州(一唐甄)、舜水(朱之瑜)、楊園(張履祥)などの諸家は明末清初學派中の主流となった¹⁴」とされる。ただ西の17世紀の天才たちが数学や力学など自然研究において到達した高みとは対照的に、東林学派をはじめとする東の17世紀の「天才達」の思想史的意義について、島田虔次は前引箇所¹³のすぐ後に続けて、次のように指摘している。すなわち、彼らが「厳しい命がけの政治闘争のただなかに積極的に参加し、混乱した儒教理念や士大夫理念をふたたび緊張させ、立て直したことにある」という。つまり、一方、東林学派をはじめとする士大夫知識人らが、いくら「高邁な気風、堅貞不屈な気節と多種多様な体裁¹⁵」があったとはいえ、彼らによる「精彩ある思想運動」の究極の目的は、やはり「殉道忠君」にあったと言わざるを得ない。だが、それと同時に、他方、彼らはまた

国変に遭逢するに及んで、創鉅痛深の余、浮華を尽く^か割り、益ます本実に務む。徳慧術智、艱苦鍛錬を経て更に精進を為す。是に于いて、之より向こうに才情意気を以て一時に傾く者、且つ実学实用を以て卓然として一代の大師と為る。¹⁶

というように、明快にその思想学風転換の機微を炙り出し、かつその歴史的背景を浮き彫りにしたと言えよう。さらに清末梁啓超が、明中葉以降、該博さを以て知られた楊慎(1488-1559)、考証を好む焦竑(1641-1620)とその学友の李贽らが現われた後に続いて、

¹² 稽文甫『晚明思想史論』(東方出版社版、1996年)序言参照。

¹³ 前掲ホワイトヘッド著書、58頁。

¹⁴ 前掲謝国楨書、15頁。ただし、ここに列举した面々は多かれ少なかれ東林学派となんらかの繋がりがあるものの、すべて東林学派所属の者ではなかったとは言うまでもない。なお、引用文括弧内ハイフン後の人名は、筆者による注記である。

¹⁵ 前掲謝国楨書、2頁。

¹⁶ 前掲稽文甫書、173頁。

(方)以智、崇禎中に崛起し、考拠精核、^{はる}週かに其の上に出で、風氣既に開く、国初の顧炎武、閻若璩、朱彝尊等、波に沿って起こり、始めて懸揣^{けんし}の空談を一掃す¹⁷

と言ったのも、そうした学風転換のことである。

ところで、そこで言及した顧、閻、朱は、孰れも考証学の大家として名を馳せた人物であるだけに、梁啓超がそうした学風転換のキーパーソンとして、中、晩年になるほど寧ろ考証癖のない方以智(1611-1671)を取り立てて挙げたのは、なぜなのであろうか。これは、梁啓超ならではの目利きの鋭さのほかに、方以智とその学問に負うところが大きかったとしかいいようがない。なぜなら、方以智こそ、明末清初期に、イエズス会宣教師らと学問思想について切磋琢磨を行い、文学、経学、医学と書画、音楽、そして『物理小識』、『東西均』、『通雅』などの著書のように、自然学や自然哲学において、最も優れた体系的な思想成果を結実した「百科全書式」の士人学者だったからである¹⁸。例えば、彼の『物理小識』は、明清時代の中国においてよりも、新井白石(1657-1725)や三浦梅園(1723-1789)など同時代または後の世代の多くの日本人思想家を魅了し、彼らの思想の形成に大いに役立ったのは、周知の如くである¹⁹。

明末清初期に、方以智のような、所謂「泰西の学」に触れた士人読書人が数多く存在していた。彼らの活躍によって、初めて大規模な東西文化の「遭遇劇」が繰り広げられ、後世に深甚なる影響を残したのである。例えば、徐光啓(1562-1633)、李之藻(1571-1630)、楊廷筠(1562-1627)といういわゆる天主教「三柱石」のほかに、王徵(1571-1644)、薛鳳祚(1599-1680)、熊明遇(1579-1649)、游藝(生卒年未詳、凡そ方以智と同時代の人²⁰)、掲暄(1613-1695)、朱載堉(1536-1611)、王錫闡(1628-1682)、梅文鼎(1633-1721)などといった「格物窮理の学派²¹」または「格致学²²」派の面々は、謝国楨の上述リストに名を連ねた人々よりも、西の17世紀の天才達と比べて、なんらかの意義が見出せるかもしれない。つまり彼らも17世紀西の「天才達」と同じく、独自の自然哲学や「自己の概念用語に基づいて²³」、自然研究(とくに天文曆算学)に没頭し、『幾何原本』、『遠西奇器

¹⁷ 梁啓超『中國近三百年學術史』、東方出版社版、1996年、186頁。

¹⁸ 方以智について、坂出祥伸「方以智の思想—質測と通幾をめぐって」、藪内清ほか編『明清時代の科学技術史』京都大学人文科学研究所、昭和45年所収。後に同氏『中国思想研究 医薬養生・科学思想篇』関西大学出版部、平成11年に再録。蔣国保『方以智与明清哲学』黄山書社、2009年、余英時『方以智晩節考』(増訂拡大版、允晨文化実業公司、民国75年。侯外廬主編『中国思想通史』人民出版社、1992年、第四卷下冊、第二十六章などを参照。

¹⁹ 三浦梅園と方以智の関係について、島田虔次「三浦梅園の哲学—極東儒学思想史の見地から—」日本思想大系41巻『三浦梅園』解説、岩波書店、1982年所収、668頁。後に、同氏『中国思想史の研究』京都大学出版会、2002年再録、454頁。小川晴久『三浦梅園の世界 空間論と自然哲学』花伝社、1989年など参照。

²⁰ 張永堂『明末清初理学与科学関係再論』台湾学生書局、民国83年、51頁参照。

²¹ 尚叢智『明末清初(1582-1687)的格物窮理之学—中国科学發展的前近代形態』四川教育出版社、2003年参照。

²² 艾爾曼(Benjamin・Elman)「従前現代的格致学到現代的科学」『中国學術』総第二輯、商務印書館、2000年参照。

²³ Benjamin・Elman, *On Their Own Terms: Science in China, 1550-1900*. esp.chap.2 & chap.3参照。

図説』、『天経或問』、『楽律全書』などのように、今日でも驚嘆すべきすぐれた著訳書が数多く残されている²⁴。しかしながら、全体的にみて、「西学」に触発された自然研究が到達した高みというよりは、寧ろ、方法論において後の清代で最盛期を誇った経学に与えたインパクトのほうが大きかったと言わざるを得ない。清代の経学を代表する乾嘉考拠学や皖派の戴震学に西学の影響が色濃く残っているのは、その証しである²⁵。科学史上著名な「ニーダムの質問」(Needam's Question)²⁶がなぜ提起されたのか、そうした経緯からみても、その然るべき所以が分からなくもないであろう。もっとも東西の自然研究に対する単純な優劣高低の比較は不毛であり、それに、近代科学も決して単一の要素によって形成されたものではない。しかし、たとえばデカルトの「宇宙渦動説」やニュートンの「万有引力の法則」といった宇宙観は、いずれも精密な数学的自然観に基づいて創出されたように、若し数学が近代科学のみならず、現代科学ないし現代社会においても、最も枢要的な基盤であることを再確認するならば、16、17世紀、なぜ東と西の「天才たち」が数学に注いだ情熱とその到達した高みが違ったのかという問いへの解答は、自ずと「ニーダム質問」への解答に繋がるだろうと思われる。このことに関連して、かつて佐々木が「清代算学第一」と見做された梅文鼎について、次のように指摘している。「一般に、梅文鼎の東西数学についての知識はきわめて広範である。とくに伝統中国暦算学についての知識はとてつもない。ただし、ほぼ同時代人のニュートンやライブニッツほどの包括さと深さはない。また、関孝和や建部賢弘ほどの独創的才能もない²⁷」、という。そういった事実は、梅文鼎をはじめ、上述した明末清初期の士人知識人たちにも当て嵌まると言わねばならない。

さて、前書きは冗長になりすぎ、いよいよ本題に戻ることにしよう。

二、本書執筆の背景とその動機

佐々木の複数の著書、とりわけその自伝的随筆²⁸に基づき、以下、主として一九六八年の高等数学専攻から数学史への転身、それから「アルマ・マテル」(母校)プリンストン大学での学問修行とその蘊蓄、そしてポストモダニズムへの対抗意識という三つの側面から、本書の執筆背景とその動

²⁴ 徐宗澤『明清間耶蘇会士訳著提要』によると、各種のいわゆる「漢訳書」は約500部に上るといふ。『四庫全書』の中にも約37部ほど収録されている。計文徳「従四庫全書探究明清間輸入之西学」、台湾文化大学史学研究所碩士論文、民国75年。

²⁵ 黄愛平、黄興涛主編『西学与清代文化』中華書局、2008年、とくに第三編および石井剛『戴震と中国近代哲学漢学から哲学へ』知泉書館、2014年、とくに第四章など参照。

²⁶ すなわち、なぜ中国で近代科学が誕生しなかったという著名な質問である。しかしながら、この問いかけは文化史的に興味深い、科学の定義を厳密になさらない前提において打ち出されたため、必ずしも真の命題とは言えないであろう。

²⁷ 佐々木力(遺著)『日本数学史』岩波書店、2022年、第2章、123頁。

²⁸ 中部大学の学術年刊誌『アリーナ』に連載した「佐々木力学問への道程」1、2、3、それぞれ本誌第21号(2018年)、第22号(2019年)、第23号(2020年)参照。

機について、検証してみたいと思う。

筆者の知る限り、佐々木がみずから1968年の「転向」動機について、複数回語ったことがあるが²⁹、ここでは、より専門的見地からの説明一点のみを抜粋して吟味してみたい。すなわち、

私は数学を「東北月沈原」と呼ばれた東北大学数学教室で代数学を中心に学んだ元数学者であるが、…私は真剣に本気で数学研究の最前線を推し進める専門の数学研究者をめざし、大学院博士課程をも修了した。

そのうち数学研究からの転換を考えるようになった。理由はおもにふたつあった。ひとつは、20世紀後半の数学のフロンティアの問題に挑戦することにさほど大きな意義を見いだせなくなったからである。…他方、数学は世間的なこととおおいに役立っていた。たとえば、1960年代から1970年代初頭にかけてのヴェトナム戦争のようないわゆるハイテク戦争のためにである。…このような数学の状況は、数学を真摯に学ぼうと志す学徒にとってまことに不幸なものと映った。…危機との際会において人間の歴史意識はいっそう先鋭に研ぎすまされる³⁰

「東北月沈原」とは、東北大学理学部数学教室の前身にあたる旧東北帝国大学理科大学の別称または愛称である。それから、「危機との際会において人間の歴史意識はいっそう先鋭に研ぎすまされる」云々としたのは、高等数学専攻から数学史への転轍のみならず、佐々木の政治意識の昇華をも示唆しているように思われる。高校時代まで「みずから生きている時代について何らかの政治意識をもったことはほとんどなかった³¹」佐々木は、一九六八年前後の学園闘争に参加し、そうした活動によって「わたしを大きく変えた³²」。そしてこの年の五月頃、「明確なトロツキスト的マルクス主義者を自覚するようになっていた³³」という。それは、同じ年に爆発したフランスの「五月革命」からの影響より、様々な読書経験、例えば向坂逸郎訳『資本論』（全三巻）とその普及版の『賃労働と資本』、『共産党宣言』、とりわけアイザック・ドイッチャーのトロツキイ伝・三部作などの耽読による然るべき帰結だったと言えよう。佐々木は、最後まで古典マルクス主義の信仰（トロツキズム）を堅持しただけでなく、つねにその「復権」をも渴望していた。かつて、筆者に送ってきた未刊行の著書『現代マルクス主義の地平』の目次を読んでも、その悲願とともに、またより現代的見地から、広松渉の『マルクス主義の地平』（勁草書房、1969年）を乗り越えようとする意気込み

²⁹ たとえば、『学問論 ポストモダニズムに抗して』東京大学出版会、1997年、3頁。『東京大学学問論〈学道の劣化〉』作品社、2014年。序文、4頁など。

³⁰ 佐々木力『数学史』岩波書店、2010年、「自序」3頁。

³¹ 前記「佐々木力 学問への道程2」、384頁。

³² 同上、378頁。

³³ 同上。

すらあるではないかと思われる。いわば「ドグマに捕らわれない英国流の歴史学の学風³⁴」を標榜した佐々木は、古典マルクス主義こそ「資本主義の機能や解体についての深い歴史的洞察を与えることができるが、その対極の俗流「マルクス主義」はこのような洞察を必要としない。狭い実践的要請だけに応える教条なのである³⁵」と断じていた。ともかくその古典マルクス主義の信仰はどれほど思想力があるのかは、その著書『生きているトロツキイ』（東京大学出版会、1996年）や『マルクス主義科学論』（みすず書房、1997年）並びに『21世紀のマルクス主義』（ちくま学芸文庫、2006年）などを繙けば、自ずと実感できるであろう。

それから、本書の執筆背景は、1976年から1980年まで、四年間にわたるプリンストン大学での学問修行とその蘊蓄に負うところが大きかったと思われる。当時プリンストン大学科学史・科学哲学大学院博士養成プログラム（歴史学科所属）では、チャールズ・C・ギリスピーをはじめ、トーマス・クーン、アンソニー・グラフトンなどの名家を擁しており、いわば、ハーバード大学に継いで、20世紀の新興学問分野たる科学史研究のメッカという様相さえ呈していたとされている³⁶。佐々木の直接の師は、当時若き数学史家のマイケル・マホーニイ（Michael Mahoney, 1939-2008）准教授であった。入学早々、マホーニイ准教授から、同大学院生が一週間の必読文献ノルマは、2000ページにも上ると「脅された」。佐々木は何割達成できたかは別として、本書の訳者としてみれば、「アルマ・マテル」での「猛読」と厳しい学問修行による蘊蓄は、本書のいたるところで活かされていると言ってよい。「記憶の歴史学³⁷」によると、セミナーでの「発言の無さ、ないし少なさは問題となったと思うが、ともかく提出したエッセイの質によって私は進級できた。簡単に要約すれば、ラテン語の読解力と高等数学力ということである³⁸」という。

ここで、当時、彼方で学問修行の実情の一端を垣間見るエピソードを二つほど披露して吟味したい。

まず一つは、トーマス・クーン教授を自身学問上の「ゴットファーザー」とみなした佐々木は、師の「数学の革命を認めない立場」に挑んで、「ジュディス・グラビナーやヘルベルト・メーアテンスの影響もあって、数学の社会史的次元を強調し、サボーによるギリシア公理論の起源の研究を踏み台として、「革命」を明確に認める観点を打ち出した。クーン教授は、私の立論を全面的に認めるわけではなかったが、容認する立場にかなり同情的になったように私には感じられる³⁹」、という。

そして、もう一つは、ギリスピー教授のセミナーで発表したラプラス決定論的宇宙観の数学に「大間違いを犯した」という「発見」である。後に、ギリスピー教授が中心に編纂された「最高の科

³⁴ 佐々木力『生きているトロツキイ』東京大学出版会、1996年、序文。

³⁵ 同上、139頁。

³⁶ 佐々木力「科学史の興隆」岩波講座 現代思想10『科学論』岩波書店、1994年、後に『学問論 ポストモダニズムに抗して』の第4部として再録。

³⁷ つまり、前記「佐々木力学問への道程2」である。

³⁸ 『学問への道程2』、416頁。

³⁹ 同上、415頁。

学史事典⁴⁰』と言われた『科学者人名事典』 (*Dictionary of Scientific Biography*) の「ラプラス人名項目」に、「非限定流量の極大・極小の研究」[1774a] に、わざわざ佐々木の「発見」を記したほどである。いわば、「私によるラプラスの数学史的な位置づけは、ギリスピー教授のラプラスに関する所見についての心の琴線に触れたことは確かであった⁴¹」と、晩年の佐々木自身も感慨深く述懐していた。アルマ・マテルでの創造的な学問修行による蘊蓄が、如何に本書に影響を及ぼしたかということがわかるエピソードではあるまいか。

そして最後に、本書執筆の最大な動機は、ポストモダニズム思潮への対抗意識そのものであると言える。

今日では、ポストモダニズムと言え、恰も名実とも「ファッショナブル・ノンセンス⁴²」とすら聞こえるようだが、しかし第二次世界大戦後、ヨーロッパ (特にフランス) から濫觴し、そして猛烈な勢いで順次北米、日本を始めとする東アジアの思想世界を席卷したポストモダニズムの思潮は、途方もない巨大な思想課題であろう。それを全面的に考究するのは、本稿の趣旨を逸脱するため、ここでは、本書の主な執筆動機の一つとして、佐々木がなぜポストモダニズムを論敵として、闘志を燃やしたかという問題を限定して考えてみたい。

管見の限り、佐々木のポストモダニズムへの対抗意識は、主として次の二点に集中して表れているように思われる。まず一つは、ポストモダニズム批判の主要標的の一つは、間違いなくデカルトである。これは、佐々木の専門分野がデカルトの数学思想のため、彼もエピゴーネンの一人としてデカルトを無条件に弁護せねばならないという意味では決して無く、むしろポストモダニズム思潮による「軽薄な近代理解⁴³」への反撥である。いわば、ポストモダニズムの思潮が「17世紀以降険しく稀有の高い峰を形作っていった思想の歩みと比較して、その何と安易な侏儒の業に似たレヴェルの低さよ⁴⁴」というのは、氏の持論である。言い換えれば、つまり「論敵の最も低いところを乗り越えるのは容易な業であろう。小器用な思いつきを声高に発信することによって、歴史や思想に対峙してはなるまい⁴⁵」、ということである。本書の序文においても、次のように警鐘を鳴らしている。「十七世紀の巨匠たちは、古代・中世の学問観からの転換のために、まずその良き理解を前提とした。衰退に向かいつつある旧来の学問思想の挽歌を正當にうたえる者がその最もよき理解者であるべきことをわれわれは片時も忘れるべきではない⁴⁶」。そういったところから、その反撥の真意が確かに読み取れるのではあるまいか。

⁴⁰ 佐々木力『科学史的思考—小品批評集』お茶の水書房、1987年。103頁。

⁴¹ 「学問への道程2」、413頁。

⁴² アラン・ソーカル、ジャン・ブリクモン著、田崎清明ほか訳『「知」の欺瞞—ポストモダン思想における科学の濫用』岩波書店、2000年参照。

⁴³ 本書序文、8頁。

⁴⁴ 佐々木力『デカルトの数学思想』東京大学出版会、2003年。序文、9頁。

⁴⁵ 同注40、195頁。

⁴⁶ 本書序文、9頁。

そしてもう一つは、ポストモダニズム思潮を「新保守主義」と同定する見方によるものである。ポストモダニズムのイデオログたち、たとえば、リオタールやドゥルーズ・ガタリらが盛んに説く言説（例えば、「資本主義的生産関係の強靱さ」とか「社会主義革命の非現実性」などといった言説）から、「私がポストモダニズムを保守主義のソフィステイケートされた一形態ととらえ、…彼らポストモダニズムのイデオログの著書の中でわれわれが目撃することになるのは、無数の“non sequitur”（論証不足の推論）なのである⁴⁷」。

そうした趣旨から見れば、本書は、まず、衰退に向かいつつある十七世紀旧来の学問思想の挽歌を正當に歌える「その最もよき理解者」為らんとするために、執筆されたのではないかと言ってよい。

三、本書の構成とその基本内容

本書を含めた佐々木の「近代科学史の三部作⁴⁸」は、「日本の数学史研究を一挙に国際的水準にまで引き上げた労作」であり、「わが国の科学史研究における金字塔⁴⁹」でもある、と具眼の士から高く評価されている。

本書は、西欧17世紀のデカルト、ホッブズ、ニュートン、ヴィーコ、そしてフランシス・ベーコンといった近代科学の基礎を築いた代表的思想家に照準を宛てて、いわば「近代」誕生の思想的現場に立ち返って、第一次の原典史料への地道な読解を通して、近代学問理念の精髓とその限界を鮮やかに描き出した力作だと言えよう。早くも発行の翌1993年に、サントリー文化財団の歴史・思想部門の学芸賞の受賞に輝き、受賞選評代表者の中埜肇教授による評語は、次のように開陳されている。それを抜粋して次に引用しておく。

（佐々木氏は）豊富な文献的資料を駆使して博雅な論議を展開しながら、単なる歴史的叙述に終始するのではなく、同時にすぐれて現代的で文明論的な問題意識に導かれて、近代科学の根本にある志向性を批判的に検討し、それを通して近代性そのものについて理性的な再評価（肯定的にも否定的にも）を試みるのである。しかもこの作業において注目すべきは、同氏が科学史家にありがちな一面性を蟬脱して、複眼的思考によってその所論を展開していることである。例えば、…近代的な科学理論は単に「経験的成分」から成り立っている（というのが常識的な主張である）のではなくて、同時に「超越論的な戒律」によって支えられ、これを不可欠な要件として含んでおり、しかも後者は歴史の中で形成され、その妥当性を確認されるのだ

⁴⁷ 前出『学問論 ポストモダニズムに抗して』16頁。

⁴⁸ つまり本書のほか、『科学革命の歴史構造』全2巻、岩波書店、1985年；講談社学術文庫、1995年及び『デカルトの数学思想』東京大学出版会、2003年である。

⁴⁹ 野家啓一「追悼数学史家佐々木力」東北大理学部数学教室『同窓会誌』令和3年9月30日。

という洞察がある⁵⁰。

「すぐれて現代的で文明論的な問題意識」とか「複眼的思考」といった指摘は、本書の本質的特徴を的確に捉えたと言えよう。

さて、本書の基本構成は、次の通りである。序文のほかに、序論「科学革命論——十七世紀的学問理念の形成と受容」、第一章「〈われ惟う、ゆえにわれあり〉の哲学はいかにして発見されたか」、第二章「リヴィアサン、あるいは機械論的自然像の政治哲学」、第三章「ニュートン主義の世界概念」、第四章「ヴィーコの近代科学論—デカルト的数学・自然学に抗して」そして、結論「テクノロジー科学論の離陸——フランシスコ・ベイコンと科学論の第二の航行」を含めた全六章からの構成である。

なお、本書の序文と後記において、著者による各章の縁起とその内容についての極簡略な説明がある。それを踏まえたうえ、蛇足ながら、筆者の所見を若干記しておきたい。

まず序論「科学革命論—十七世紀的学問理念の形成と受容」の初出は、新岩波講座『哲学』、第8巻『技術・魔術・科学』（1986年）である。近代自然科学の正当化のために生まれ出た十七世紀の学問思想を総括的に論じ、また本書の主題を統べる綱領的なものと思われる。

本序章では、デカルトとの哲学論争で知られた17世紀フランスの唯物論哲学者ピエール・ガッサンディ (Pierre Gassendi, 1592-1655) の学問思想に「好意的な光を投じ⁵¹」られたとともに、十七世紀的学問理念の特質は「有用性と確実性」だったことを指摘したが、それよりも、読者の目を引いたのは、冒頭から引用したストア学派の祖であるキティオンのゼノンにまつわる逸話であろう。つまりこの逸話に現れた二律背反の論理を隠喩として自然科学の研究における「近代的自然像の本末転倒」現象—それは、すなわちヴィーコが『新科学』の中で指摘した「自然世界の研究にばかりに熱心で人間社会史を省みない哲学者⁵²」の姿勢そのものである—に対する批判に援用した意図そのものである。そうした厳格な批判を経てこそ、はじめて自然 (科学) 研究における二律背反の現象が解消でき、かつフッサールの意味する歴史的「生活世界」(Lebenwelt) の復権が実現できると考えられる。これは、本書のみならず、間違いなく著者の研究生涯を貫いた基本的学問観とでも言うべきものであろう。

第一章「〈われ惟う、ゆえにわれあり〉の哲学はいかにして発見されたか」は、デカルトの『方法序説』刊行三百五十周年記念のため、1987年に執筆されたが、そのアイデアは1986年早春に得たという。初出は『思想』第七六〇号 (1987年10月) である。

近代数学、科学思想にとって枢要なデカルトの数学思想について、さらに細密な解説は、著者の

⁵⁰ サントリー文化財団 HP に掲載。

⁵¹ 本書序文、6頁。

⁵² 本書序論、7頁。

プリンストン大学大学院に提出した学位論文“Descartes’s Mathematical Thought⁵³”で展開されているが、勿論、本章においても、その形成の軌跡が跡付けられている。それを荒っぽく要約すると、つまりイエズス会の学舎ラ・フレーシュで数学の啓蒙教育を受けたデカルトは、『精神指導の規則』以前の数学は、主として代数解析技法の確立、それ以後の数学は数学の哲学適用、そして『方法序説』以降の数学は、神の創造物としての数学的真理の「発見」である。だが言うまでもなく、本章において数学思想の形成よりも、もっと肝腎なのは、第一真理「われ惟う、ゆえにわれあり」というデカルトの不可疑の言明の解明なのであろう。

当初、純粋数学の確実性に捉えられたデカルトは、さまざまな懐疑論との格闘の中で、純粋数学の確実性を知識一般の規範とする立場をいったんは放棄した後、如何に「われ惟う、ゆえにわれあり」という言明に到達したのかということ論証法から検証してみると、こうである。すなわち、「*われ惟う、ゆえにわれあり*」は、大前提の隠された三段論法ではなく、単一命題なのである。つまりこういうことなのである。現在私は、哲学的にか数学的にか知らないが、ともかく思惟しているとす。そう思惟している間に私ははたして存在するであろうか？ 答えはいつも肯定的であろう。「*コギト（cogito）*」は決して「無限後退」に落ち込むことはない。コギトは如何なる前提もいない、ただすこし反省してみればよいだけのことである。たちどころに、「われ惟う、ゆえにわれあり」の真理性が明らかになるだろう⁵⁴。だが、そういったデカルトの言明は、ほとんど悉くピエール・ガッサンディからの論駁に遭った。とりわけこの第一真理の言明について、「私はあなたの話に十分賛成したいと思うが、問題の焦点は正にそう言う点にある。事実上、そういう点こそ、そんなに遠回りして一々仮説を立てて説明する必要もないではないか」。だからこそ、「あなたは未だに迷妄と幻想の中から抜け出していないと私は思わざるをえない⁵⁵」、とデカルトの言明は寧ろ骨折り損だと扱き下ろしたと言ってよい。だが、それにもかかわらず、デカルトは、この言明を出発点として全学問構造の改革を図ろうとしたが、その試みは基本的に蹉跎に終わってしまった。また近代科学の超越論的基礎づけの企図一般も不成功に始終せざるをえず、つまりいわゆる「デカルトの循環」に陥った、ということである。

第二章「リヴァイアサン、あるいは機械論的自然像の政治哲学」は、近代的政治システムと近代学問の相関的構造を素描したトーマス・ホッブズの政治一学問思想の骨格を解明しようとするとともに、ホッブズの政治学改革の背景にある科学論的もくろみを知ることによって、近代学問がいかに近代的政治システムと密接不可分に結合しているかを明らかにしようとしたものである。本章の初出は『思想』第787、788号（1990年1、2月）である。科学史思潮にホッブズ復興の傾向とともに、1988年のホッブズ生誕400周年を記念しての学会の動向がこの論稿を書く動機となり、本書収載の

⁵³ Chikara Sasaki, *Descartes's Mathematical Thought*, Kluwer Academic Publishers, 2003. 実質上の増訂版となった邦訳版は『デカルトの数学思想』東京大学出版会、2003年など参照。

⁵⁴ 本書、89頁。

⁵⁵ 伽森狄著、庞景仁译《对笛卡尔《沉思》的诘难》商务印书馆、1995年。5頁。

際、部分的に改訂したという。

デカルトやニュートン、およびフランシス・ベーコンといった、いわば近代科学の基礎を築いた巨人に較べて、ホッブズは、その自然哲学に裏付けられた政治哲学の三部作⁵⁶と最もよく知られる『リヴァイアサン』などの著書が示すように、科学論というより、近代政治哲学の基礎を築いた思想家として歴史的に位置づけられている。ところが、ホッブズの成熟期の政治思想は、彼による「科学の開眼」（いわゆる「エウクレイデスの「発見」）以後となって、はじめて顕著にみられ、かつ体系性をもつようになっただけに、その政治思想が自然哲学または科学との相関関係は、ホッブズ研究者にとって、まず避けて通れない問題であろう。本章で取り上げられた「シュトラウス説」をめぐる甲論乙駁のありさまは、それを示している。

ところで、訳者としてみれば、やや意外な感じを拭えないが、つまり著者がもっとも精魂をこめて取り組んだのは、本書の他の各章にも増して、まさに「近代の最大の鬼子⁵⁷」となったホッブズの政治哲学とその科学思想の構造関係を解明しようと試みた本章なのであると言わねばならない。

例えば、本章では、ホッブズの近代科学的方法との出会い、彼によるそれへの貢献にまつわる重要な「事件」とそれに関する研究状況を説明するために、まず、七つの項目にまとめて克明な解説を施している⁵⁸。そのうえで、ホッブズの自然哲学と政治哲学を繋ぐ重要な方法概念として「分析と総合」を位置づけ、それによって数学や自然哲学の概念がいかにか政治哲学の中で生かされたか（あるいは生かされていないか）を浮き彫りにしようとした。さらにこの両者を結合する重要な考えとして、「コナトウス」（Conatus）という概念に対して、丁寧な解説を試みた。なおこれにも止まらず、この概念の外延において、17世紀に再興をみせたエピクロスの有名な運動のわずかな「偏り」（παρέγκλισις）という考えに対するルクレティウスのラテン語による解説をまで援用して、ホッブズの自然哲学と道徳哲学の密接不可分説を強調した。最後にまた、ホッブズの自然哲学と対極にあるルソーを取り上げて、「ホッブズの科学思想と政治哲学との結合関係の特異性をルソー的オルターナティヴを呈示することによって浮き彫りにし⁵⁹」ようとした、いわば重層的な論法を展開してみせたように、である。

このような螺旋的推進とでもいふべき重層的論法は諄いようだが、それだけに論旨に重み、または結論に重層性をもたせたと言えなくもない。例えば、ホッブズとウォリスとの数学論争、そしてボイルとの真空の存在をめぐる論争などの例示を通して、「ホッブズの学問体系の科学論的部分は蹉跎であったとはっきり指摘されるべき部分と、今日的観点から言っても高く評価されるべき部分を併せ持っている⁶⁰」というような結論を得たのも、その一例であろう。

⁵⁶ つまり、『市民論』、『物体論』、『人間論』である

⁵⁷ 本書、191頁。

⁵⁸ 本書、146-157頁参照。

⁵⁹ 本書、251頁。

⁶⁰ 本書、195頁。

要するに、ホッブズは、アリストテレス的学問体系と懐疑論の克服のために、ガッサンディとともにエピクロス主義を採用し、メルセンヌとともにエウクレイテス的な数学的确实性の規範を特別視した。さらに彼はデカルトとともに一步を踏み出し、デカルト的二元論に対して、唯物論的二元論を称揚した⁶¹。こうしたことから、ホッブズが建設しようとする新しい政治哲学を「機械論的自然像の政治哲学」と規定できるし、またホッブズを特異な近代科学思想の建設に向かわせしめたのも、十七世紀のイングランド特有の政治と宗教事情という「脅迫観念」そのものだったと言える。

以上の考察により、本章ではホッブズ其自然哲学と政治哲学はそれぞれ独立した自律性をもつとする「シュトラウス説」と異なり、ホッブズの政治哲学は、その機械論的自然哲学と特異の科学思想と密接不可分という結論を持ち得たのである。

第三章「ニュートン主義の世界概念」は、近代科学の最大の巨人アイザック・ニュートンの科学思想を如何なる思想的背景と目的をもって構築されたものであるかをめぐる論考である。初出は『思想』第762、763号（1987年12月、1988年1月）である。本章の素案がニュートンの『自然哲学の^{プリーニキピア}数学的諸原理』刊行三百年を記念しての学会シンポジウムで公表されたが、本書収録の際、かなり加筆したという。

1687年に世に問うたニュートンの『自然哲学の数学的諸原理』は、「近代の中核的思想を体現している⁶²」空前の巨著であるとともに、17世紀科学革命の勝利を象徴した科学史上の壮挙でもある。それだけに、「現代の批判的科学史家がなさなければならないことは、何も「理性の権化」として十八世紀に作り上げられたニュートン像をただひたすら弁護することでも、また「魔術師」ニュートン⁶³を無批判的に捏造し、その結果近代科学の価値を不当におとしめることでももちろんない。ニュートンの考え行ったことを歴史的理性によって批判的に再構成し、ともかく徹底的に理解することであろう⁶³」、と著者はまず自分に課せられた課題と取り組むべき姿勢を明示してみせた。それと同時に、本章で主題的に問わねばならないのは、この巨著が世に問われたと同時に、イデオロギーとして機能を果たした「ニュートン主義」とはなにかという問題であろう。

ところで、本章において、著者は、克明に『プリーニキピア』の形成軌跡を跡付け、その内容構造についても、かなりの紙幅を費やして解説を施したが、肝腎なニュートン主義という概念については、これといった明確な説明をなさったとは必ずしも言えないように思われる。ともかくそれは、数学的に思索し自然法則を定式化する科学のスタイルから出発し、神と自然や社会および人間⁶⁴の関係を統一した世界観で観照するような自然哲学が一種のイデオロギーとして機能を果たしたことだと規定してよいであろう。ところが、そもそもニュートン自身が自らの名を冠する「主義」を創造しようとは思わないが、この点に関して、ニュートン研究者のマーガレット・ジェイコブ女史

⁶¹ 本書、253-256頁。

⁶² 本書、267頁。

⁶³ 本書、272頁。

が的確な表現を提供してくれた。つまり、ニュートンは、ボイル講演に蝟集し、ホップズの唯物論には勿論、デカルトの二元論にも反対する彼の信奉者の人々に「自分の業績のもつ威信を貸し与えた⁶⁴」のである。というのは、『グリーンキピア』で説かれた宇宙的秩序や意匠は、ニュートンの初期の信奉者達の手の中で、自然の側からキリスト教社会のモデルを与えるものとなった⁶⁵のである。しかも十七世紀末、「十八世紀の初め頃、ボイル講演の多数の出版物や翻訳は、イギリスでも大陸でも、教育ある一般の人々にニュートン主義自然哲学を広めるための主要の媒体となった⁶⁶」からである。

そうした意味で、ニュートンの科学は、その宗教思想ないし社会史的含意と切ってもきれない関係があるとはっきりと見てとれる。そうした特徴は、成熟期ニュートンの自然哲学、つまり『グリーンキピア』第二版の「一般註解」と『光学』の「疑問」となると、一層顕著にみられるようになった。そして、このようなニュートン成熟期の自然哲学は、数学もしくは実験を介して定式化された自然法則を超越的神が統率するという構図を持っている。それは、「ニュートン科学のイデオロギー的次元」とか「回帰宇宙像の構想」並びに「神と絶対空間」といった独特の形で宗教思想と結合するものだったのである。

ニュートンの時代において、科学がつねにキリスト教の宗教思想と密接に結びついた知的営為として、多分にイデオロギー的役割を果たしていたことは、今日ではもはや常識であろうが、しかし、それと同時に、科学または科学技術は「現代的危険性の根源⁶⁷」でもあることは、万人にとって実感のある認識では必ずしもない。それこそ、著者が本章の最後で隠喩として取り上げた「ニュートンのリンゴ」は、特定の科学的発見のきっかけの象徴としてだけではなく、科学時代に生きるわれわれの社会的危険性の象徴でもあると喝破した訳であろう。

第4章「ヴィーコの近代科学論—デカルト的数学・自然学に抗して」は、寧ろ近代科学思想の正統的伝統にとって異端にあたるヴィーコの学問思想を紹介した内容である。その初出は、『思想』第752号（1987年2月）の特集「ヴィーコを読む」である。著者が岩波文庫創刊60周年記念の一環として翻訳刊行を手掛けた『学問の方法』を準備する過程で草されたが、著者のヴィーコへの興味は、早くも清水幾太郎の『倫理学ノート』（岩波書店、1973年）や『新しい学』の邦訳（中央公論社、1975年）が刊行された時から芽生えていたが、それが決定的になったのは、1977年の夏休みにオハイオ州のオーバーリン・カレッジの構内で『われらの時代の学問方法について』のテキストを読んで、それを現代数学の支配的思潮批判の啓示として受け止めた時であるという。本書収録の際、大幅に改訂した。

本章では、デカルト思想の根幹部である数学的自然学と解析的数学について、ヴィーコの批判の

⁶⁴ マーガレット・ジェイコブ「キリスト教とニュートン主義的世界観」R・リンドパーク他編、渡辺正雄監訳『神と自然—歴史における科学とキリスト教』所収、みすず書房、1994年。

⁶⁵ 同上。

⁶⁶ 同上。

⁶⁷ 本書、277頁。

射程を見定めることによって、その先に、「歴史の新動向」が見えてくるかもしれないという希望を抱いて執筆されたのである。従って、まず「ヴィーコの批判」とは何かとまず解答しなければならない。

ヴィーコの批判は、主として初期の著作、『われらの時代の学問方法について⁶⁸』（1709年刊）および『イタリア人の太古の知恵』（1710年刊）においてである。ヴィーコ独自の思想が初めて開陳されたのも、デカルトに対する批判も、これらの著作においてであった。それでは、ヴィーコの批判の矢はどこに目がけて射たかという、それは、ずばりデカルト流の自然学における代数的解析方法である。なぜなら、そうした方法の専一支配によって、便利さの代わりに、最も大事な数学の基礎、たとえば総合幾何学を忘れてしまい、「クリティカ (critica) のみもてはやされ、…トピカ (topica) はまったく無視されている⁶⁹」状態に陥りかねない。ましてやいかに完全な自然学体系であっても、それを最終的理論とみなしてはならない。換言すると、自然学理論の妥当性は常に地平的であるしかない、と学者の「うぬぼれ」を戒めて自覚せねばならない、ということである。

ヴィーコがそうした認識のもとで練り上げたのは、「真なるものと作られたものとは相互に置換される」(Verum et factum convertuntur) という原理である。これこそ、ヴィーコの最も基本的な知識論的原理であるとともに、彼の真理判断、つまり自然哲学の基準でもある。そしてヴィーコは、まさにこの原理にもとづき、確実な人間的真理のモデルは、数学とりわけ幾何学だと主張したのである。というのは、数学的証明は、「原因による」証明なのであって、つまり「操作」(operatio) にほかならないからである。しかしヴィーコは、この証明基準は自然学には不向きであると考えた。いわば、「一匹の蟻を作り出すには、この宇宙を創造するのに劣らない力を要するからである⁷⁰」。それは、神にしか成し遂げられない営みであって、人間にはとうてい無理な仕業だからである。そこで、ヴィーコは、デカルトやマールブランシュらの理論的な神の存在証明は「不信心な好奇心によるもの」だと非難したのである。

もちろん、ヴィーコは自然学研究における数学的方法を決して認めない訳ではないが、彼が反対

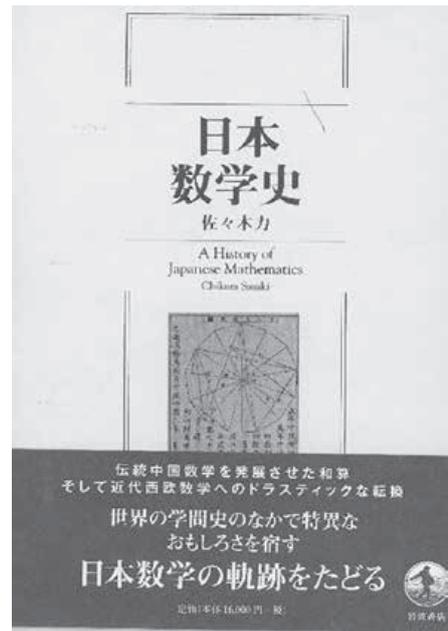


図1. 佐々木氏遺著『日本数学史』書影

⁶⁸ 邦訳版は、上村忠男・佐々木力訳『学問の方法』という書名で1987年に岩波書店より刊行された。

⁶⁹ 本書、439頁。ちなみに、ルネサンス期人文主義的論理学から由来したクリティカ（つまり、ars critica、判断の術）とトピカ（つまり、ars topica、発見の術）は、ヴィーコがデカルトの批判的方法として、よく援用している対概念である。

⁷⁰ 本書、396頁。

するのは数学的方法で自然学体系を構築し、そうすることで自然が解明し尽くされると見なすような思考法そのものである。要するに、ヴィーコは自然学における数学的方法の有効性を十分認めながら、その方法の適用は、個別的問題を経験的に十全に考察した上でのごとくでなければならぬ。ましてや、数学的に定式化された諸法則によって自然が解明し尽くされたなどと考えるはならない。その妥当性は地平的でしかないのである。

それに、ヴィーコは、「デカルトの敵」という名に相応しく、デカルトの第一真理をも批判の俎上に載せた。彼は、デカルトの第一真理に対して、「思惟している私の「意識」(consentia)の存在の現実性が保証される場所で、何らかの「知識」(scientia)についての言明が確証されたことには全然ならない⁷¹」と反論した。仮にここの「意識」(consentia)が「感性認識」と置き換えられるならば、「知識」(scientia)は「理性認識」とでも言うべきであろう。ともかくヴィーコほど根源的にデカルト的思考の中心を射た思想家がいなかったと言えるかも知れない。

ヴィーコは、近代科学を武器とする啓蒙時代の幕開けの時代に生き、しかもヨーロッパの南の果てともいえるナポリで生きた。さらにその地方の大学で地位も報酬も比較的低い弁論術(修辞学)の勅任教授を務めて生を終えた。しかしさまざまな意味で周辺部に位置したからこそ、彼は近代思想の主潮流に代わりうる思索の跡を遺したとも言える。彼は、ある意味では、デカルト以上に、理性的で冷徹な人間劇の観察者であったと言えよう。「流行に溺れず、したたかに時代の趨向を凝視しながら、守護し続けた⁷²」ヴィーコ思想こそ、現代社会に甦られるべきものであろう。

最終の結論章「テクノロジー科学の離陸—フランシス・ベーコンと科学論の第二の航行」は、本書執筆前後の科学論が乗り越えたものと錯覚したフランシス・ベーコンの科学思想を再点検のため特別に書き下ろした章である。ベーコンは、本書に登場する思想家たちに通底する思想を打ち出した思想家として、近代科学思想の最強のイデオロギーは、その政治=学問思想に求められるとすら言えるかも知れない。いわば、「第二の航行」に踏み出した近代科学に対応できるような現代科学論の批判的プログラムを再措定するため、従来考えられていたほど「素朴」でなかったベーコンの思想の再検討によって近代科学を、その実践的側面、つまりテクノロジーとの関連でみることに導く狙いである。

本章では、著者は、まずベーコンの『学問の進歩』(英語版1605年)とそのラテン語増訂版『学問の尊厳と進歩』(1623年)および主著『ノヴム・オルガヌム』(1620年)に対する丹念な読解によって、ベーコンにまつわる「素朴な帰納主義」とか「数学の役割を重視しなかった」という二つの「神話」を論破した。

そして、特に注目すべきなのは、ベーコンこそ、初めて中世からルネサンスにかけて特に西ヨーロッパで発展したさまざまな職人たちの機械的技芸(artes machanicæ)を意図的に新しい学問の中心に据え、さらにそれを「実験科学」(scientia experimentalis)とでもいうべき新しい形態の自

⁷¹ 本書、442頁。

⁷² 本書、445頁。

然誌・自然哲学として彫琢した思想家であり、その背景には、十七世紀の科学革命周辺において、技術が科学に先行していた歴史的事情があった、という指摘である。

ともかくベイコンは、その学問構造の大変革プログラムとでも言うべき『大革新』(Instauratio Magna. 1620年)において、「テクノロジー科学」の振興を公に宣言した時、イングランド世俗政治の最高位である大法官の地位に登り詰めた。彼の学問思想が一見した以上に、はるかに老練な論理性と現実性をもったのもそれと関係がある。それとともに、同時代の宗教的、政治的混迷を克服しようとする動機と緊密に結びついた特異な政治哲学が形成されたのも、争えない事実である。そういった意味で、ベイコンは「テクノロジー科学を唱道するイングランドのマキアヴェッリの徒⁷³」と規定できるかも知れない。

要するに、ベイコン的学問理念に関して、今日学問的に要請されていることは、科学とテクノロジーの社会史を批判的に記述することであるにほかならない⁷⁴。

四、終わりに代えて

一般に、如何なる学術書でも、その価値判定の最大基準は、ひとえにその独創性如何にかかっているというのは言うまでもない。その意味で、訳者として、本書の独創性とは何かとまず自問自答せねばならない。ところで、それは、該博な文献渉猟による重厚な論証でもなく、また著者の溢れんばかりの自信⁷⁵でもない。驚くなかれ、端的に言えば、それは、つまり本書で提起された思想家たちの数学思想の精査を軸に、各々の思想史的意義を明らかにする手法そのものではないかと思われる。恰もホワイトヘッドが興味深く指摘したように、「各時代の数学的諸観念を深く研究せずして思想史を編むことは、丁度『ハムレット』と題された劇からハムレットを除くようなものである⁷⁶」、と。ましてや16、17世紀に、哲学諸観念の形成に最も重大な影響力があったのは数学であるにほかならないからである。これなら、著者のような数学史家でしか首尾一貫して成し遂げられない芸当ではないか。例えば、本書第一章において、従来、一般にあまり知られていない人文主義者のモンテーニュの数学思想をまで丁寧掘り起したところは、興味深い例証の1つであろう。

ところで、訳者として言えば、本書の深い学識に裏付けられた雄渾な論述に魅了されながらも、それに対する疑念乃至異議はいささかもないと言ったら偽りになるであろう。勿論、そこには訳者の理解力の問題もあろうが、ただ一々例示すると煩雑になるため、二点のみ述べさせてもらおう。すなわち、まず一点目は、第三章において、ニュートン主義の社会史的含意を浮き彫りにするた

⁷³ 本書、482頁。

⁷⁴ 本書、497頁。

⁷⁵ 例えば、著者は『デカルトの数学思想』の序文に次のような自負を披露している。「東アジアの学徒は、もはや世界の一地方の傍観者ではなく、世界史の学問史の主役たりうるのである」という。

⁷⁶ 前掲ホワイトヘッド書、31頁。

め、それが啓蒙主義との関係を俎上に載せて検討するのはよくわかるが、しかし更に、それをウェーバー的「資本主義の精神」とパラレルに議論する点が理解しにくい強引さすらあるのではないかと危惧する。それから最終章において、新しいペイコン像の提示に成功したものの、「テクノロジー科学」という概念の厳密な定義、及びそれが現代の科学技術との構造関係については、明快な解説を施したとは必ずしも言えないように感じる⁷⁷。それはともかく、本来なら、中国の某大学出版社と契約済み



図2. 2007年6月、弘前大学人文学部第二回国際研究集会での佐々木力氏

であり、かつ著者逝去三周忌記念の来春に、本訳書が出版される予定であったが、残念ながら、ある財団の海外出版助成の申請が採択に恵まれず、出版の延期を余儀なくされた。幸いなことに、目下では、本訳書が中国科学院大学人文学院成立二十周年記念の一環として企画された『科学文化叢書』の一冊として選定され、そこからの出版助成によって、来年内の出版が見込まれるようになった。ちなみに、本書中国語版の序言は、日本を代表する科学哲学者の野家啓一東北大学名誉教授に依頼し、快諾いただいたことを非常に僥倖に思っている。

かつて佐々木は、「画狂」北斎に倣って「学狂」と自認し、また安藤昌益とスピノザの生きざまに深く惹きつけられていた⁷⁸。特に破門後のスピノザに倣って、静謐な生を送ろうとしたが、しかし「その妥協を知らない狷介孤高の性格と行動から時に周囲と軋轢を生じ、誤解を招く面も少なからずあったが、彼の学問と向き合う真摯な姿勢と情熱、そして歴史家としての揺るぎない矜持は、紛れもなく本物であった⁷⁹」。ついでに、報告しておくが、アレクサンドリアのディオファントスの『数論』（大型複製本）、前述した全巻揃う『最高の科学史事典』、D・T・ホワイトサイド（D・T・Whiteside, 1932-2008）編纂の『アイザック・ニュートン数学論文集』全八巻および『ライプニッツ全集』（独語）と『デカルト全集』（仏語）などを含めた約3000冊ほどの佐々木が珍藏していた羅、伊、仏、独、英諸語および古典ギリシア語ないし少部のアラビア語の各種学術書は、目下、既に佐々木ゆかりの中国科学院大学（北京雁栖湖キャンパス）図書館に運ばれ、早くも来学期から「佐々

⁷⁷ この点について、むしろ前掲『学問論 ポストモダニズムに抗して』においてより明確に論じているように思われる。つまり第二次産業革命以後、「科学に基づく技術（science-based technology）が社会に大きなインパクトを与えるようになった。「近世の「テクノロジー科学」は「理論技術」というべき側面をもっていたが、逆方向の応用科学として技術が大々的に歴史の舞台に登場したわけである」。同書122頁。

⁷⁸ 佐々木の最終講義（紙上）は「スピノザと安藤昌益の自然哲学—彼らの生きざまに惹かれながら最終講義に代えて—」と題されている。『アリーナ』第23号、2020年11月。

⁷⁹ 野家啓一「晴天の霹靂 追悼 佐々木力」『週刊読書人』2021年1月15日。

本文庫」として公開され広く利用される運びである。これは、近年、日本の学者にとって稀有の僥倖であると言えよう。しかもきっと後世で語り草となる日中学術交流における意義深い史話の1つであるのみならず、また必ずや彼地の後進学徒たちに大いに裨益する快挙であろう。

最後に、生前の佐々木が愛用したコスのヒッポクラテスの箴言を引用して拙文を終えたい。それは、精確に佐々木の生涯を象徴しただけでなく、また晩年の彼が深く心酔した荘子の「我が生や涯有りて、知や涯無し」(『莊子・養生主』)という名言とも暗合しているかと思う。それは、すなわち、“*vita brevis, ars longa*”(人生は短し、学術は長し)、とである。